“風”のたより

平成２４年８月１７日
そよかぜ委員会事務局
筑北村社会福祉協議会
電話：６６－２５０６
www.chikuhoku-shakyo.or.jp

関ブロ合同研に参加

平時における地域福祉の重要性を再認識

先月19・20日、関東ブロック郡市区町村社協職員合同研究協議会（関ブロ合同研）が群馬県利根郡みなかみ町で開催され、筑北村社協も参加しました。

会場には、関東甲信越各地から３００名余りの社協職員が集まり、「その時、社協はどうする」のテーマの下、各種協議が行われました。

特に福島県南相馬市社協の災害ボランティアセンター立ち上げに係わった当時の担当者の焦りや憤り、不安と混乱の渦巻く中での対応の発表には、会場中が水を打ったように静まり、時には胸にこみ上げるものを感じる場面すらありました。

今回のテーマにある「その時」とは、東日本大震災を始めとする各地での災害時のことですが、被災したらどうするか、を考えてしまいがちのところ、平時から何をすべきか、という観点に立って考えるべきであり、それが今回の災害が私たちに与えた最大の教訓と受け止めるとする共通認識に至ったのでした。

本合同研では、いくつかの分科会に分かれて、さらに突っ込んだテーマで協議が行われました。筑北村社協は「小規模社協における事業展開」のテーマで、新潟、千葉、茨城、群馬の３市１村社協の方とグループワークを行い、地域に埋もれた力を引き出すため、また、既存の力をさらに伸ばすためには何が必要かを考えました。

そこで私たちが導き出した答えは、「○○をやります」としっかり宣伝し、時間がかかってもずっと「言い続け」、「まわりを巻き込む」ようにしていくことが大事というものでした。

これは、広報を充実させ社協が何であるか、何をしているのかをみなさまに伝えることの大切さ、目的に向かってブレない姿勢をとることの大切さ、そして何よりここに住む全ての方との係わりを大切にすることを言っているもので、いま筑北村社協が目指している姿に近いといえます。

力をつなぎ大きな力に

不可能を可能にするには？

関ブロ合同研の日程には、夕食時を利用した情報交換会があり、分科会以外にも近隣都県の社協職員と、ざっくばらんにお話しする良い機会となりました。

安曇野市出身で千葉県松戸市内にお住まいの１０２歳の女性を故郷の安曇野市にお連れしようと、自家用車の運転を運転ボラさんにお願いしたこと、沿道の市町村社協に事前に連絡して緊急事態に備えたこと、無事に目的を達成して松戸へ帰ってきてホッとしたこと、などを松戸市社協の方に伺って、いろいろな人の力をつなぎ合わせることで、一見不可能に思えることも可能になることを改めて知りました。

全国にいる社協職員はみな同じ志を持った者同士。決して自分のやり方に満足せず、数々の参考になる事例を共有しながら、各々の地域の福祉のために邁進（まいしん）しなければならないと、強く感じた二日間でした。

つながろう日本－震災義援金を社協窓口にて受け付けています。

お知らせ

かわら版型情報紙「“風”のたより」は平成22年10月の発刊以来この24号まで、月刊紙として発行してきましたが、来月からの社協広報誌の隔月刊化（奇数月）に合わせ、その合い間月の発行（偶数月）となります。

発行回数は減りますが、より地域福祉の啓発に特化した内容にしていきたいと考えていますので、みなさまご期待いただくとともに、今後ともよろしくお願いいたします。